

「Seventh Code (セブンスコード)」★★★★

2014 (平成26) 年1月24

日鑑賞<テアトル梅田>

監督・脚本：黒沢清

企画：秋元康

高山秋子／前田敦子

松永／鈴木亮平

斉藤／山本浩司

シャオイエン／愛茜（アイシー）

2013年・日本映画・60分

配給／日活

<プロモーションビデオ（PV）としては絶賛だが・・・>

黒沢清が監督し、前田敦子が主演した映画『セブンスコード』が、劇場で1週間だけ公開。それは本作が、第8回ローマ国際映画祭で最優秀監督賞と技術貢献賞を受賞したためらしい。しかし、もともとは、秋元康の企画で、黒沢清監督を起用して前田敦子の新曲『セブンスコード』のプロモーションビデオを作ったところ、その出来があまりに良かったため、映画祭に出品の上、劇場でも公開しようということになったらしい。昨年12月30日に観た『もらとりあむタマ子』（13年）は、山下敦弘監督が前田敦子を主役にして劇場公開用に作った映画だから、ちゃんとしたストーリーとちゃんとしたアピール点を持った映画だったが、さて本作は・・・？

本作は60分と結構長いが、ラストに登場する新曲『セブンスコード』の歌いぶりを見れば、「なるほど、この映像はこの曲のプロモーションビデオなのか」ということがよくわかる。そういう視点で観れば、本作はインパクトに富んでおり良くできているが、劇場公開用映画のストーリーとしてはあまりに荒唐無稽。しかし、1週間の限定上映ということも逆に、評判が評判を呼んで映画館はどこも満席になっているらしい。私が行った金曜日の昼間でも、95%の入りだったから大したものだが、鑑賞後の感想は賛否両論が出るはずだ。

<セブンスコードとは？ギターを学んだ人なら・・・>

ちゃんと一音ずつ押さえながらメロディを弾くのは難しいが、コードをかき鳴らすだけなら簡単。ギターやウクレレを学んだ人なら、誰でもそんな経験があるはずだ。また、長調ならC、F、G7、短調ならAm、Dm、G7という3つの基本コードの押さえ方さえわかれば、そのほとんどがギター伴奏つきで歌える『花はどこへ行ったの』などのフォークソングは多い。しかし、ディミニッシュコード、テンションコード等になると複雑で、かなりの練習が必要になる。

しかして、「AKB48」を大成功させて一躍「時の人」となった秋元康は、なぜ前田敦子の新曲に『セブンスコード』というタイトルを？また、そのプロモーションビデオの監督を、人間の本質にある「怖さ」を描く事に定評のある黒沢清監督に依頼したの？本作の撮影期間は1週間とタイトだったらしいが、全編ロシアを舞台とし、『HK／変態仮面』（13年）で一躍有名になった（と共に、きっとギャラもアップしたであろう）鈴木亮平を起用しているから、製作費は結構かかっているはず（もっとも、中国人女優の愛茜（アイシー）は、これがデビュー作だから、ギャラは安い？）。

セブンスコードは必ずしも基本コードより複雑な音になるわけではないが、理論的にはややこしいから、きっと前田敦子が歌う『セブンスコード』もややこしい曲？何となくそう思っていたが、意外にも・・・。しかし、本作のストーリー展開は、意外、意外、また意外の連続だ。

<意外！意外！また意外！>

本作のチラシには「ロシアの壮大な大地で、彼女はひとりの男を追い求める一。」とある。たしかに、本作冒頭には、大きなトランクをゴロゴロと引きずりながら、「松永さん」と呼ぶ男（鈴木亮平）を追い求める高山秋子（前田敦子）の姿が登場するが、日本で一度食事に誘われただけで、ロシアまで松永を追い求めてやってきたというストーリー展開が、まず意外！

またチラシには、「全編オールロシアロケ！鬼才・黒沢清が仕掛けた『謎』に、世界が驚愕！！」とある。たしかに、恐そうなロシア人のおじさんたちの手でゴミのように袋に入れられて棄てられた秋子が、何とか自力で脱出し、斎藤（山本浩司）が経営し、シャオイエン（愛茜／アイシー）が手伝っているレストランに転がり込むところから始まる、ミステリーめいたストーリー展開は謎に満ちている。さらに、なぜ秋子はロシア語をしゃべれるの？本作冒頭で観客は全員そんな疑問を持つはずだが、本作中盤に前田敦子が見せるアンジェリーナ・ジョーリー顔負けのあっと驚く見事なアクションを見れば、その謎は解けるはずだ。しかし同時に、謎は次々と、謎を呼ぶことに・・・。

さらにチラシには、「待ちうける、予測不能の結末とは。」「想像を超える結末があなたを襲う、極上のサスペンス・エンターテインメント」とある。たしかに、本作後半に核爆弾「クライترون」などという物騒なセリフが登場するから、「アレ・・・」と思ってしまうが、その後の展開を見ていると、前田敦子ってこんなにカッコいい女優だったのか、と思ってしまう。そして、そんな中、AKB48のセンターから大きく成長し、今や立派なソロ歌手として、髪をかき乱しながら『セブンスコード』を歌うあっちゃんの姿が・・・。なるほどロシアでこんな波乱万丈の体験をした女スパイのようなあっちゃんなればこそ、こんな曲が・・・。そんな意外！意外！意外！なストーリーも、プロモーションビデオであればOK！

<第二の山口百恵に？彼女を『霧の旗』のヒロインに！>

1973年に森昌子、桜田淳子と共に「中三トリオ」の一人としてデビューした山口百恵は一番遅咲きだったが、その後大人気に。彼女のデビュー曲『ひと夏の経験』を聴いてもわかるように、当時かわいいだけだった桜田淳子と違って、山口百恵は若いくせにどこか憂いや力ゲがあったから、たちまち女優としても起用されることに。そして、若手女優の登竜門になる『伊豆の踊子』や『潮騒』などの名作に三浦友和との共演で次々と出演し、女優としても大成功したが、さて女優・前田敦子は？私は『苦役列車』（12年）も『クロユリ団地』（13年）も観ていない。しかし、山下淳弘監督の『もらとりあむタマ子』を観て、前田敦子の女優としての能力にビックリしたが、それを本作を観て再確認。なるほど、彼女のそういう潜在的能力を認めたために、山下淳弘監督はまず『苦役列車』で彼女を起用し、中田秀夫監督も『クロユリ団地』で彼女を起用したわけだ。

弁護士の私は、松本清張原作の『霧の旗』が大好き。その主役（ヒロイン）は殺人罪で有罪とされ獄死してしまった兄の冤罪を晴らすことに執念を燃やす、ちょっとエキセントリックな妹・桐子だ。山田洋次監督の65年版『霧の旗』では倍賞千恵子が、そして西川克己監督の77年版『霧の旗』ではどこか陰りのある女を演じればピカイチだった山口百恵がそのヒロインを演じていた（詳しくは『名作映画から学ぶ裁判員制度』153頁参照）。しかして、女優前田敦子が本作のような正体不明の謎の女をキリリと演じることができるのなら、『霧の旗』のヒロイン桐子役も十分演じられるのでは？近時、テレビドラマでは米倉涼子が松本清張の『黒革の手帳』のヒロインを演じて一躍ハマリ役になったが、前田敦子に『霧の旗』の桐子役を演じさせれば、ハマリ役となって大フィーバーする可能性があるのでは・・・。